

連載  
第10回  
**福聚山史**  
篠原 重一 文  
及川 晋一 編

祖師堂のお祖師さま

1、長生日蓮聖人像

祖師像『長生日蓮聖人像』の由来について述べてみたい。製作者といわれる日持上人のプロフィールは、日蓮教団全史・日蓮宗小辞典によると次のように書かれている。

鎌倉中・後期の僧、六老僧の一人、建長二(一一五〇)年、幼名松千代、蓮華阿闍梨と号す。静岡貞松蓮永寺開山、わが国海外伝道の始祖として名高い。

「長生開運日蓮大菩薩略縁起」の内容をかいつまんで申し上げると、祖師堂の日蓮聖人の御像は弘安五(一一八二)年祖師御入滅の後、六人の高弟中第五の日持上人によって作られた。日持上人は駿河国(現在の静岡県)庵原郡松野に蓮永寺を創立した人物である。また、日持上人は日蓮大聖人の生前よりの宿願であった法華信仰を中国・インドへ帰する使命にあたるべく、自ら祖師像を彫刻したとか。そして異国に渡たるには長生不死でありたいと念じ、その祖師像に向かって五百日間、あらん限りの力を注いで祈り

をおこなったという。永仁三(一一九五)年の正月一日には、単身、北(中国・インド)を目指し故郷蓮永寺をあとにする。その後、道を奥州にとり蝦夷(北海道)へ渡り、さらには大陸にまで渡ったと伝えられている。



池上本門寺の祖師像

日蓮小辞典によると次のように記載されている。

青森県には黒石の法嶺院と青森市の蓮華寺に足跡が残り、北海道には函館石崎の妙応寺や榎法華村の妙顕寺、松前の法華寺など各地に日持の遺跡が伝えられている。さらに中国東北部、モンゴルにもその遺跡があるといわれているが、その詳細、没年などは未詳。

その後の祖師像の消息は、常円寺第十二代住職である豊苗院日暮上人(中興開基、永代聖号初祖 享保七年寂)の時代へと一気に飛ぶ。日暮上人は肥前国にある常照院(現在の佐賀市本庄町鹿子八二)の住職の弟子で心要院と名乗る僧侶であった。後に中村檀林(千葉県香取郡多古町にあった日蓮宗僧侶の最高教育機関、つまり今でいう大学)で学び、優秀な僧侶となり常円寺の住職として就任されている。そして、その就任の際に持参した尊像がこの日蓮聖人像であると伝えられているのである。

さて、その後の話となるが、現在祖師堂に祀られている祖師像は、天保年間に雑司が谷風山感応寺に祀られ、感応寺廃寺後は池上本門寺に後退座となり安政三年に御開帳が行われてから十六年後の明治五年七月二十六日、牛込禅宗万昌寺の境内を借りて御開帳を営み、その直後に常円寺に御遷座になったというのである。この詳細は次号で述べたいと思う。

(つづく)